シリーズ

お互いの力でまちづくり ④

日本ふるさと塾主宰・萩原茂裕

悪条件を逆手にとってまちを再生。

長野県の東北部にある野沢温泉村は、人口約五千人の小さな村です。野沢菜漬けの産地として知られていますが、もう一つ、スキーのメッカとして有名です。

ところが、この村は、かつては貧しい村でした。

たいへんな豪雪地帯で、学校の体育館がつぶれたという歴史もあります。そして、村の大半が急傾斜地です。周囲を山に囲まれたすり鉢の底にあるといってもよく、その昔は、陸の弧島といわれた交通の不便な所でした。

ところが、いまや日本で一番豊かな村に変貌を遂げたのです。山間へき地のこの小さな村が、なんと上下水道100%の完備で、さらに驚くことは、プロパンガスが全村集中管理方式で供給され、都市ガス並みに、コックをひねれば瞬時に出る――冬季の暖房用の灯油も全村地下配管という、うらやましい村となったのです。

化学反応が起こっているか

スキー場の建設が村を変えた

いったい、どうしてこのような素晴らしい村になったのでしょう。結論からいいますと、村おこしのステップで「化学反応」が起こったということです。

村おこしに、なぜ化学反応が……？　と思われるかもしれませんが、実はとっても重要なことなのです。元素記号では、Hは水素、酸素はOです。このHとOとをいくら足しても、掛け算しても、HはH、OはOです。ところが、H_2Oとなると、これは〝水〟になります。つまり化学反応が起きたわけです。

「雪しかない村」「急傾斜地」という、村の人たちにとってあきらめでしかなかった悪条件を逆手にとって、化学反応させて、まったく異なったものをつくりだしたのです。それが、スキー場の建設でした。

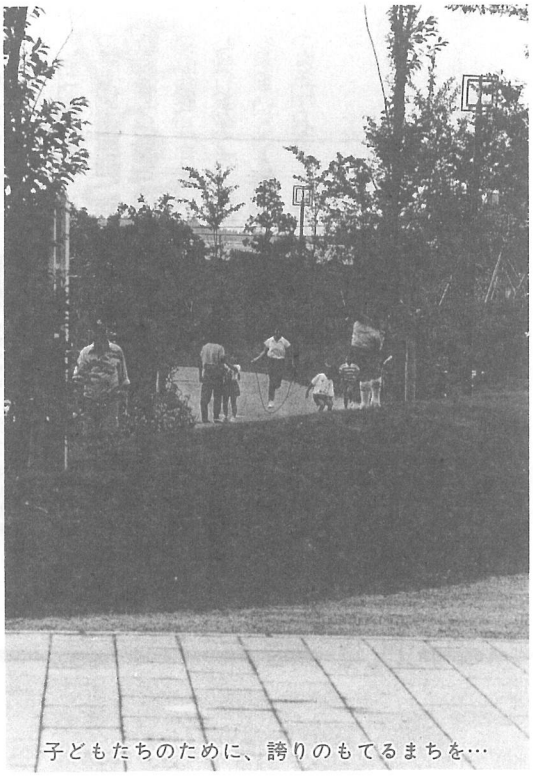
住民の熱意が大きなエネルギー

「豪雪地帯」をH、「急傾斜地」をOとみなしたとすると、H_2Oはスキー場となったのです。

自分たちの山の木を切ることから始まり、そのお金でスキー場を作りました。そして、そこをすべて村営にしました。この村営のスキー場の売り上げが、なんと約三十億円といいます。公営ですから純益は次の公共投資に向けられ、豊かな村となるのは当然のことです。

しかも、他の村と違うのは、村の人たちが、みんなスキーを習ったことです。ここでスキーができないのは、赤ん坊くらいといいます。スキーに対するこうした住民の熱意が、まちづくりの大きなエネルギーになったのです。

このように、まちをよくしようと思ったら、悪条件に目を向けることも大事です。そして、それを克服して、化学反応を起こさせ、まちを再生させるのです。



子どもたちのために、誇りのもてるまちを…